

わかものまんなか社会へ — 地域参画の事例集 —

序 若者をまんなかにする

神奈川大学人間科学部教授 齊藤 ゆか 氏

参加・参画のアラカルト

若者をつくる、お気に入りの空間

来た、見た、書いた —インタビューで出会うまちのあれこれ—

「ちょっとだけやってみない？」 が、ひらく世界

「マイプロ」からはじまる、まちへの参画

大学が育む、未来への種

サポーター、というライフスタイル

COCORUかまくら／鎌倉青少年会館

知る、伝える。ボランティア／横浜市青少年育成センター

フレンズ☆SAKAE／Sakae Wakamono Creation2024

ふろぶろKananishi／FROM PROJECT

神奈川大学共通教養科目「体験型研修」

神奈川大学社会教育課程 かながわユースフォーラム実行委員会

県立青少年センター人材育成推進事業「ステップアップキャラバン」

／神奈川県子ども会連絡協議会

若者支援のアレンジレシビ

参画のはしごから

成長を可視化するふりかえり

若者とコーディネーターのためのQ&A

まちと、若者と

家庭、学校に次ぐ子ども・若者の第3の居場所、地域社会。

しかし、若者について考えるとき、実は家庭での困難に見舞われていたり、学校が忙しすぎたり、地域のつながりが希薄化しておりきっかけが掴めなかったりと、まちに若者の姿が見えにくくなっているケースが少なくありません。

一方で、若者にとって、まちでの体験、特に他世代との関わりは、社会をしなやかに生き抜く力を育み、主体的に他者に関わる意欲につながり、さらにはその後のキャリア観にも影響を及ぼす、大切な体験です。このギャップをどう埋めていくか。この視点こそ、「こどもまんなか」時代の神奈川県に、いま求められていることではないでしょうか。

参画のコーディネーターに向けて

今回、神奈川県青少年指導者養成協議会では、子ども・若者の中でも主に「若者」と呼ばれる高校生・大学生年代を中心とした世代に注目し、県域での特徴的な社会参画の事例を取材しました。その中で見えた、まちの様々なプレーヤーの心の動きや活動の工夫、また支援者向けのQ&Aなどをまとめ、「わかものまんなか社会 ―地域参画の事例集―」として制作しました。

取材の中で見えてきたことは、若者を応援すると地域全体が活性化すること。これを活用しない手はありません。若者の居場所づくりやまちづくり、そして支援者の企画づくりや仕掛けづくりのヒントに、本冊子をぜひご活用ください。

目次

序

若者をまんなかにする：大人ができること 神奈川大学人間科学部 教授 齊藤 ゆか 氏	3
--	---

参加・参画のアラカルト

CASE_01 若者をつくる、お気に入りの空間 COCORUかまくら／鎌倉青少年会館	8
CASE_02 来た、見た、書いた—インタビューで会おうまちのあれこれ— 知る、伝える。ボランティア／横浜市青少年育成センター	14
CASE_03 「ちょっとだけやってみない？」 が、ひらく世界 フレンズ☆SAKAE／Sakae Wakamono Creation2024	20
CASE_04 「マイプロ」からはじまる、まちへの参画 ふろぶろKananishi／FROM PROJECT	28
CASE_05 大学が育む、未来への種 ① 神奈川大学共通教養科目「体験型研修」	38
CASE_06 大学が育む、未来への種 ② 神奈川大学社会教育課程 かながわユースフォーラム実行委員会	40
CASE_07 サポーター、というライフスタイル 県立青少年センター人材育成推進事業「ステップアップキャラバン」 ／神奈川県子ども会連絡協議会	42

若者支援のアレンジレシピ

SPICE_01 参画のはしごから	50
SPICE_02 成長を可視化するふりかえり	52
SPICE_03 若者とコーディネーターのためのQ&A	57

序

若者をまんなかにする ：大人ができること

神奈川大学人間科学部教授 齊藤 ゆか

将来世代を担う若者を、私たち大人はもっと大事にしなければならない。彼らに、もっと優しい眼差しが必要である。それは、ユニセフが2016年に提唱した「子どもにやさしいまちづくり(CFC)」にも通底する。

しかし、自治体関係者は、子ども・若者育成支援に悩んでいる。大人の多くは、学校と家の往復しか知らない。子ども・若者時代を忘れ、彼らが何を考えているのか、学校外でどう育まれるか、具体的なイメージが湧かないのである。

本書『わかものまんなか社会へ—地域参画の事例集—』は、日本・神奈川で行われている「若者(中高生や大学)」の事例検証を行っている。われわれは、まず、現場でどんな取り組みが行われているのか、地域における若者の育み実践から学ぶ必要がある。

本書を読む際に、「若者」に関する3つの視点を紹介しておきたい。第一に、若者とは何者なのか。改めて「若者」の今の特質を捉えたい。第二に、私たち大人は、「若者」のココロとカラダをどう揺り動かせばよいのか。そのために、大人ができる仕掛け、条件設定や環境を提示してみたい。第三に、将来世代を担う若者の未来に向けた、若者政策へ誘いたい。

若者とは何者か

若者とは、何者なのか。どこで何をしているのだろうか。

いつからか、私たちは「今どきの若者は…」と口にする大人になった。こうした嘆きは、紀元前のヒッタイト帝国(現トルコ)の石板に「最近の若い者は…」と書かれていることや、古代ギリシャの哲学者プラトンが「最近の若者は目上の者を敬いもせず…」と語った逸話にもみられるように、昔からあることは有名な話である。したがって、まるでかつての若者が優れていたかのような言説はどれもあてにならない。ただ、私たち大人も、かつては「若者」だったのだ。

若者の類語として、「年が若いこと」・「若人(わこうど)」・「若輩」・「青年」がある。辞典によれば、若い(Young)は、「若い」・「幼い」・「年下の」・「若々しい、元気溢れる、はつらつき」・「新しくできた、新興の」・「未熟な、経験が浅い、不慣れ」の意を持つ。関連語として、「若気の至り」(深く考えないで、勢いに任せて行動すること)がある。大方はその経験者ではないだろうか。

要は、若者の未熟は当然のことであり、若者は、経験が浅く、不慣れで、未完成なのである。大人時代は飛ぶように時が流れるが、若者時代はスローモーションのように時が刻まれていく。若者は、「自分のため」だけに注力できる時間を持つ、という特質がある。

■ 若者の今

では、若者はこうした思春期及び成年前期を、どのように過ごしているのだろうか。

国立青少年教育振興機構(2024)の調査によれば、放課後や休日に保護者が子どもに活動的な時間の過ごし方を希望しているのに対して、青少年自身は家でゆっくりできる過ごし方を希望する傾向がみられることが明示された。デジタル化に加え、コロナ禍に拍車がかかり、子どもたちのリアル体験の不足が顕著となっていることも、いまこの時代の課題である。それは、自然体験や社会体験の不足ばかりではない。宿泊体験等を含む学校行事の中止や部活動の縮小も余儀なくされた。

コロナ禍の空白期間を子ども時代に過ごした若者に、その後の人生にどのような影響があるのかは未だ明らかになっていない。しかし、不登校の小中学生34.6万人(文科省 2023年)の数値は、過去最多を更新し続けている。義務教育を離れた高校生、大学生年代も同様の傾向であろう。こうした実態は、看過できるものではない。

今こそ閉じこもりつつある彼らを包摂する、「若者をまんなか」にする、新たな「まなび」の仕組みを考え直していかなければならない。

若者のココロとカラダをどう揺り動かすか

■ 若者のココロに寄り添う：自己と他者の受容

若者を理解するには、当事者（若者）から「聴く」ことが一番である。「聴く」態度は、傾聴手法が参考になる。例えば、聴き手が、相手の言葉を丁寧に頷いたり、繰り返したりすること。相手の話す言葉に常に集中すること。徹底的に相手の気持ちに寄り添う姿勢を持つことなど、共感的態度が求められる。つまり、個々人の嬉しさや悲しさを感じる、エモショナルウェルビーイング（ポジティブな感情）を一緒に感じながら、気持ちを引き出していく暗黙知がある。しかし、話し好きの教師にとっては、傾聴は意外と難しい技と言えるいえるだろう。

筆者の経験によれば、若者は想像以上にナーバスで慎重である。何かを始める前に、心配や不安が渦巻き、躊躇する場面に出くわす。「自信ない→自信ある」、「こわい→大丈夫」、「できない→できる」など、ネガティブからポジティブへの転換には、「励まし」と「支え」が重要となる。その際、悩みを持つのは自分ひとりではない、同じ心持ちの仲間がいる、そのように感じられる失敗が許される安心できる空間（場）があるとよい。また、彼らを「待つ」余白の時間も必要となる。若者研究者の西村（2011）は、「癒し」による原点回帰（人間らしい感覚にリセット）がシフトチェンジと統合の契機となる、という。

若者の居場所づくりを先導する西野（2024）は、大人の『『ふつう』や『あたりまえ』から解き放たれる』重要性を強調する。「ありのままを受け入れる」、「肯定的なまなざしで見守る」、「信じてあげる」、「大丈夫！（という姿勢、声掛け）」など、子どもの命に寄り添うと、エネルギーが湧いて子どもたちは自然と動き出す、という。若者の自己理解や自己成長には、他者からの受容が不可欠となる。

ともすると、青少年の支援や指導に奔走する大人は、コミュニケーションが得意で、ポジティブで、自信に溢れ、タイムパフォーマンスを求める熱血派が一定程度存在している。だからこそ、われわれ大人は、若者のココロに寄り添う、優しい「まなざし」を持つことが大事なのである。この試みが、CFCにつながっていく。

■ 若者がカラダを動かす：心がワクワクする環境を整える

「食わず嫌い」とはよく聞く話だ。活動等に参加しないのは、その一種だと思われる。しかし、今を生きる若者は、自分の経験不足に既に気づいている。興味や関心がないわけではない。ただじっとずくまっている、あるいは、何も考えないように努めているだけである。

それゆえ彼らは、静から動への「きっかけ」や「後押し」が欲しいし、誰かの声掛けを待っている。筆者は、こうした階層を「潜在的活動」層に位置付けている。例えば、ボランティアであれば、「潜在的ボランティア」層は6～7割程度いると目算している。「潜在的ボランティア」は、「役に立ちたい」という社会貢献意識はあるが、実際には活動していない層を指す（齊藤2022）。未来を創る若者に、心がワクワクするような、多様な出会いや経験ができる環境を整えるのは大人の役目といえる。その際、若者をお客にして、サービスを提供するのではなく、若者の「やりたい」を応援し、徐々にカラダを揺り動かす導きが必要である。あくまで、若者は「客体」ではなく、「主体」なのである。

よく、「若者が主役」、「若者が活躍できるまち」、「若者の参画」、「若者会議」を標榜するまちがある。しかし、若者は一足飛びに「若者参画」はできない。若者が、客体から主体へ、参加から参画へ、シームレスにつながっていくゆるやかな仕掛けがあるとよい。「仕掛け学」については、松村（2016）を参照されたいが、平たく言えば「つい引き込まれてしまうものが仕掛け」という。仕掛けには、物理的トリガと心理的トリガがある。筆者が特にユニークだと思う点を抜粋すると、「仕掛けと『遊べる』」、「『挑戦したい』と思わせる」、「気になる、楽しそう、ワクワクする、といったポジティブな期待（がある）」、「他者承認を導入する」など、好奇心をくすぐる仕掛けがよい。

上記を参考に、「いつ」・「どこで」・「誰が」・「誰に（と）」・「何を」・「どのように」・「どの予算で」の条件・環境設定については、事業担当者の力量に委ねられている。その際、人との出会いには、ダイバシティ（多様性）の視点が重要である。要は、性別や年齢、出身地や国籍など異なる背景を持つ人がいる方がきっとおもしろい。

未踏の未来にむけてアグレッシブに行動を

あらゆるものがネットでつながり、動かなくても、ゲームやスマホ動画やSNSで、音楽や映画を楽しめる世の中になった。わざわざ図書館に出かけなくても、人工知能（AI）が教えてくれる。お金をかけて旅行にいかなくても、バーチャルな空間のなかで世界中を旅できる。しかしながら、それはリアルな体験の機会を失わせるばかりか、やがて人とのかかわりが分断された社会へと変貌させる。若い時は二度無い。未踏の未来であっても、将来世代の若者には、もっとおもしろい場へ誘いたいものである。何より、失敗できる経験が必要である。また、アグレッシブに行動してほしい。それは、若者一人ひとりのウェルネスも高めることになるだろう。

国連が定めた「持続可能な目標（SDGs）」の達成を目指して、「質の高い教育をみんなに」届けるために、集い、学び合う居場所と機会が求められる。既に、EUでは若者政策（youth policy）の重点化が行われている。若者の意見表明が、若者政策の形成過程に結びつく「若者議会（Youth Council）」がある。とりわけ、ドイツ（正式、ドイツ連邦共和国）においては、青少年育成活動は100年以上の歴史がある。青少年育成活動は、「主体形成」と「民主主義教育」を支援することを目的とする（齊藤 2024）。こうした若者政策の先進国に、われわれは学ばなければならない。

さあ、私たちのまち、神奈川でどのような若者参画の取り組みがあるのか、各種事例を読みながら若者の再発見をしてほしい。

<参考文献>

- 国立青少年教育振興機構（2024）「青少年の体験活動等に関する意識調査（令和4年度調査）」
https://www.niye.go.jp/wp-content/uploads/2024/05/gaiyou_R4jiritsu.pdf（2025.3.3 アクセス）
- 文部科学省（2023）「令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422178_00005.htm（2025.3.3 アクセス）
- 西村 美東士（2011）「生涯学習における「癒し」研究の展望」『聖徳大学生涯学習研究所紀要』第9号、29－35。
- 西村 美東士
若者文化論ウェブサイト「若者文化研究所」
<http://mito3.jp/mukasi/>（2025.3.3 アクセス）
- 松村 真宏（2016）『仕掛け一人を動かすアイデアのつくり方』東洋経済新報社
- 西野 博之（2024）『マンガで分かる！学校に行かない子どもが見ている世界』（株）KADOKAWA
- 齊藤 ゆか（2022）『ボランティア評価学』ミネルヴァ書房
- 齊藤 ゆか（2024）「ドイツにおける社会教育福祉学的な青少年育成：子ども・若者の貧困を中心として」『神奈川大学心理・教育研究論集』56、5-15。

齊藤 ゆか

Yuka Saito

神奈川大学人間科学部教授。専門は生涯教育学、ボランティア・NPO、生活経営学。「プロダクティヴ・エイジング」を生かした生涯学習まちづくりの実践・研究に取り組む。

現在、神奈川大学の社会教育課程において、学生の実践的な社会参画を数多く実現するほか、県域の地域の特色を生かした体験研修プログラムを開発、カリキュラム化し、学生のフィールドワークを通じ地域社会の課題解決を図る。